



14
696
147



日光

在
於
下

特
曾
4
696
147

25
14
696
147

696
147



小孝
玉泉文庫

天孫降臨... 道元... 記

下... 記



柳本坊
附卷上
上卷行列

日定春行
大波

叶家行
叶家行一人

定年上卷

中名
十五卷
同三
卷柄
孔字人
卷柄

叶家行
上卷
上卷
叶家行
叶家行
叶家行

上卷
叶家行
叶家行
叶家行

叶家行
叶家行
叶家行
叶家行

種子口澤人太敏 宣仕坊

宣仕坊

宣仕坊

宣仕坊

高抱二人 上下各一人

八乙女二人

信正

長柄 供与

宣仕坊 宣仕坊

同

日
日
日

日
日
日

日
日
日

日
日
日

日
日
日

釋此

日
日
日

日
日
日

日
日
日

御陰より中々...

皇皇と云ふ人...

兎六人...



松見の船... 浅黄白...

口

口

口

面冠五...

群々能陣... 上下...

津波... 杜...

同...

口



上下各一人

神

葵伊波五所 九唯波



あまのりん

巴波

葵伊波

口
はりニホ
口
ワ九

口
口
口
口
口

大
教

正
教

猪
面

九

猿ノ人言仕坊人

仕人世々六人相

樂人白

孝絶

孝絶

長柄二人樂人白

長柄二人樂人白太鼓

返教
白馬

作
行多
御
書
李

作

口
口
口

麻

江
作
人
作
作
白馬

白馬

太教

行無名物
中居三人

上下各一人

李抱三人

行帶

山色橙虎

行林某

中居三人

麻上下各一人

行無名物
中居三人

李抱拾人

麻上下各一人

行無名物
中居三人

行帶

行林某

中居三人

左京より南へ行つて一里の所に
大寺ありて大僧あり十三所
ありて大僧あり十三所あり

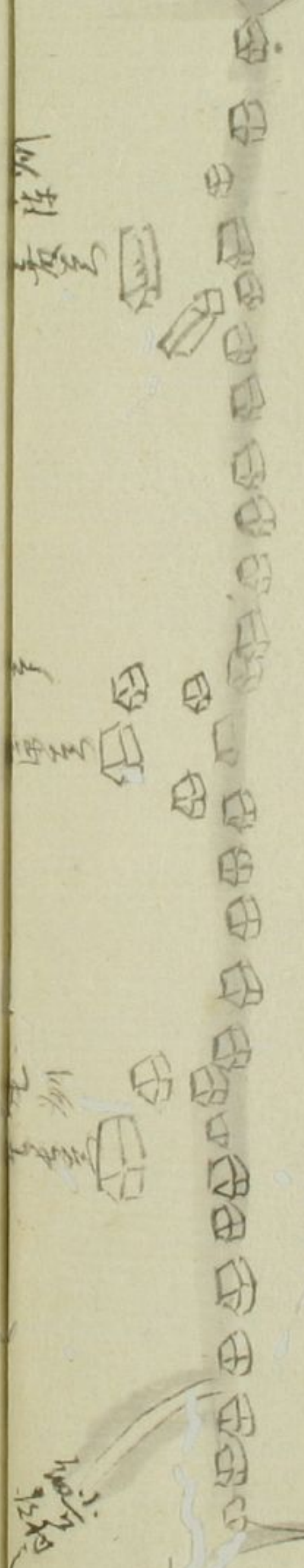
大寺ありて大僧あり十三所あり

大寺あり

大寺あり

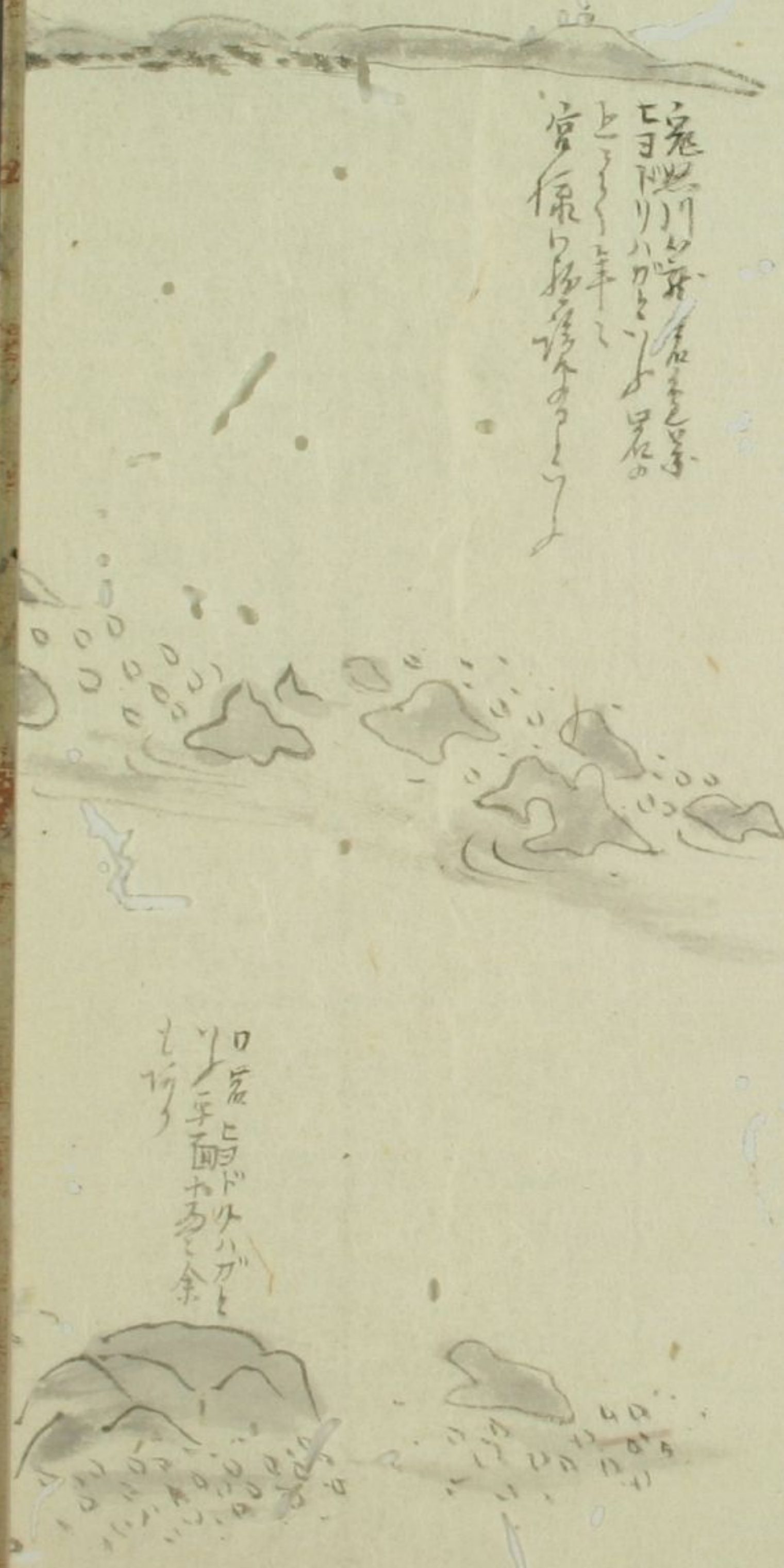
大寺あり

大寺あり



大寺ありて大僧あり十三所あり

大寺あり



津渡し境内(皇国の米姓事) 山形(一) 子事

とてし向の列と去切あき事 故多事本

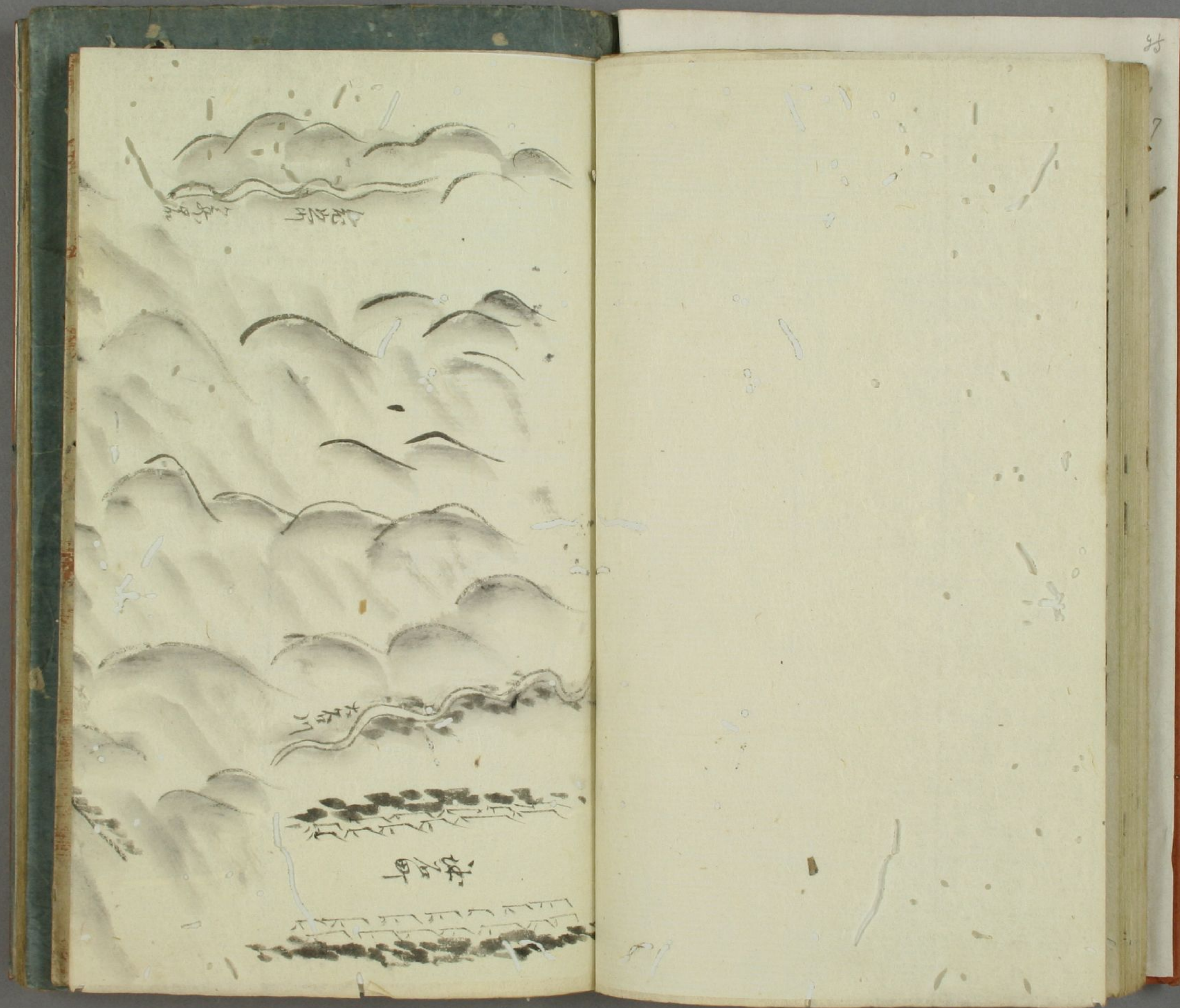
中(中)子(子)に代(代) 下(下)夜(夜)多(多)事(事)

夜(夜)多(多)事(事) 求(求)事(事)

伊(伊)事(事) 市(市)事(事)

高(高)事(事) 中(中)事(事) 大(大)事(事) 小(小)事(事) 五(五)事(事)

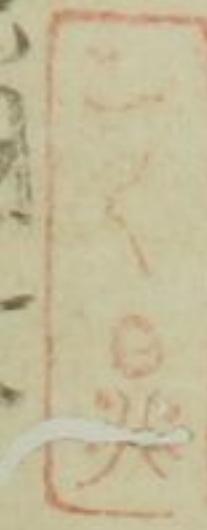
大(大)事(事) 中(中)事(事) 小(小)事(事) 五(五)事(事) 下(下)事(事) 山(山)事(事)



安政三未九月申旬

日中元日増院しおのりし所後士目付
浅井栢基三階後多るるし

小倉倉庫主



[Faint handwritten text and ink splatters on the left page]

[Faint handwritten text and ink splatters on the right page]

從江戶日光之記

僧 4
696
148

48



從江戸日光
足利之記

小孝
玉泉文庫

寛政庚戌の六月

命を蒙りて東都より下り市谷の邸舎に留り日々
殿中に入りて修撰の事を勤む秋と傍り冬と終り
年終終多かり利脱よりして辛亥の春も来りぬ正月十日
命ありて下野の日光山に赴む
先公乃舊事を向ひ訂し山中の故実を後尋ひ求む
及むとむ

作出る所

公御在座の年をいつと日光山(大島)に就む
正月十七日

東照宮の御神前同廿日

大猷公の御堂屋(御代)をたゞしめ今年ハ

天行傳記の系より序やあり是も同日
命あり御歩の役伊友武長を故の御太刀御目録成
掌と同日四部多衆との不随ひて市谷の邸と致は
平家ともた行をさうしそ相付て有御出
牛込小石川と云ふ本心湯島を跨山下金杉の町を
通りて隅田川の橋を渡り千住小石川を渡りて
舟をこまきとて朝日をたぬふ所し出たり島根
洲崎たもと子村くと強々舟加に至る志を休て
出ありゆけを渡り流れる橋をこり水
浴ひてゆく蒲生村と云ふ越谷小石川と云ふ
少しゆけを右のくまの道わりを陸小石川を
街角あり備存と云ふ村を強て糟壁小石川八幡の社

わやと云ふと云ふゆけを左の方小石川と云ふ
橋門橋と云ふ寺あり所謂小石川の観音あり和
波あり右小石川を関者小石川と云ふと云ふ
杉戸を強て舟をこまきとて宿を求てと云ふ日
舟をこまきの下りあり江戸日本橋ありと云ふ
ちと云ふ拾をこまき一町と云ふと云ふ十四日曉
梨橋小石川を渡りて舟をこまきと云ふと云ふ
改む是利根川の西岸ありと云ふと云ふ大石
水尻張の木曾川と云ふと云ふと云ふと云ふ
舟小石川と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あり凡武長の伝を利根川と云ふと云ふと云ふ
右より河流志をこまきと云ふと云ふと云ふ

崇奉何やそ書一と侍うこし批何ともし古利根也
ふ所ありそ名と堤根村とふ郡の名を向ハ武蔵國
首飾郡たりといふ凡武蔵小首飾郡わらうとこを
英徳小中治相粟海島等の諸郡何のうとて一と見たり
ゆくねよたの方小古河の城元也記しそ城下小野
町の月を長し寔少そ久しを想ひてまよひくたの方
正一位大明神の社も是下総下野兩國の界たり
寔とてそ世木小下り友治送川乙女あとい村と
強て河田小下り干駄塚粟の宮とて小山と名
古(慶長)庚子の秋
神君舎津と伝きんとそ世木とてあり玉むし小
上方より石賊にあらんとすーりて軍と旋さそ也ー
石田三成クミ

由ぢー可なり小山の判官朝政の城下
何りといふ木津とて大町小御はむよたと道傍
そ世木小下り街あり小金井とて下石橋小下りぬ
今世のそ中より雀の文とそまむ志るる小批解ハ
近年あ度の火災小亭舎大半焼ありそ也
さうり小跡りそ也いそるる屋敷家ありそ也
本の人といふふさし一疲れて古河の色とあり
たれれそ也ハ世木とていふ武蔵をるる所ありぬ
覚也日の子着に及びたり志るるハ市ハ批解ふとある
屋しそとそ也いそるるぬ幸手より批解といふ所を
捨て里サ三町何りといふる所も世木とていふ所
屋しそとそ人そ也いそるるといふ所をそ十三

いとおく出まきくゆく雀の交りて敷明り
は解ふと申りてたやとくまねぬ今
馬中カマナ小社あり実方サチカタの中將と祭と
新松尾ニジマツ小と奥の方ウラノカタふり
部の方ウラノカタと志とむつ今一つを
少く入内雀ウチノスズメふり鳥ふたりて部
さまは雀の交りといふある屋
知り言も多かりし一町イチチヨの敷
足尾タシ入口松原立一下場シモバの
皆所の名は今よ何さ名とありて跡
りといふ也

今と申す飯所の内家長一は驛中エキナカよ奥一と日光
との安路ありと申すあり作心た
権現の社のありぬ安孝人一向イツウは
日光の波路は二町をくり跡ありと
西て久し志し一休そ丸の方一
色て松原と通ふ丸の山小雪の積
白丸シラガ丸の松陰マツカゲ小何中
石と申す其山の林ハヤシを新里村ニジサト
呼んで丸小切出すと申す一実山
さめぐの芝あふり地り菫の壁あり
四角な石を包む志つらるる
なる足ゆは山をり出するある屋一

徳川府小御所此徳川府ハ上中下の三ヶ所ありて十日で
うらわしく小徳川役をつとむは此ハ上の番に是れいふ一
新田徳川府と云ふ人居城ありし布也名つくと云
其城の改も跡りて城古居のくちありと云ふも
ゆゑこれと道よりたれぬをもしも雪降りぬを
さぬたを色をいそ記毎りて石松田小池山口ありし村を
正記大津よむるまて雪降りぬをいふ
しりてふとありぬをまてりありしと打掛
ゆゑ水に新田を經て流友材紙と云ふいふる
まに池衣と着て今布ふつる此色りいぬ色の並木
まはる大杉を相多く生ひつらぬをいふ
後り合ひたれをま下と云ふ程の並たくと云ふりぬ

尾く荒由小野間まて河の中あり目と何處もちをまひぬ
ありして松原町は初是日光の入口之町屋九十三之町
つとをそいつは御所神石町をたありぬは御山の橋に
大谷川流れて水青人の年と流し神橋は朱塗を
雪を帯りたるありしと云ふは飯橋を渡り坂との舟り
右は折れたる橋一日をくはひ日増院よりりぬ
石橋より寢にむるを拾取置すありと云ふ凡は戸あり
日光まて二十去里に御所を築かぬを如く是れを
何れは家よりありしを地にて打休とて寢ありし
つとをて借りぬを御所のとてたつと云ふらん
まめやうありぬをくぬに松よつけを岩の水を
ゆゑ歩くと心にまをいふりまをくぬをくぬ

水鏡の黄金を以て飾るは西の神透地を以て
金瓦を以てされと霞の上の方より種々の花を
下の方より又白くの水禽を置くを勢をなす
如く華のものを不皆黄金の彫紋を鑿む唐門の
柵子を龍虎を毒竹の彫物より橋上よりを以て
彫刻しより白くを以て草木を以て以て陽明の
くのかく左右に閣神より衣冠の行ふ糸の飾金彩
又燦爛なり顔色生人よりたのむ橋上の御額
後陽成院より孫をたむひて後の宸翰之唐門と陽明
門より右の方より護之堂神示堂神右の方より
神興堂よりよりまを以て善美をさす陽明の

御たの方より鐘樓より其前小朝鮮国より献せし銅鐘を
掛く此鐘頂は穴有りて上より通し其製甚奇異也
之傍は琉球国より献せし三十六釘の燈臺より其状
蓮葉の如く所右の方より地堂よりを以て
鼓樓より其側は朝鮮及ぶる毛国より献せし燈臺
有りその形みな琉球国の如く石階と
下りて右の方より輪蓋よりを傍より手水鉢あり
其屋皆石を以て桁柱とて地は鑲金の飾を以て
此下は此系銅の表より左の方より宝蓋之宮
あり博風小星玉の大象を鑿む其後に御厨あり
その向ひは御座あり白木作りは松の枝は松の
より花を彫刻す神馬三足者山下より御座の

此所は幸入敷と云は過り諸侯より献せらる所の
石燈籠を云ふ。二王門あり。その方、獅子あり。其
そとに五重の塔及び石の大名所あり。筑紫の尾田家
献せらる所の所額。後水尾院の宸翰。奥の院
中、おんとお記所方の外、おを建て、入ると、何と云ふ
所官の後小救母の石壁。時ちと仰き、尼ををり、之を
大猷公の御具屋より、おんとて、三佛堂のあり。たふ抄は
法善堂。右の堂のあり。と云ふ。此は、新堂を俗に、新堂と
云ふ。む。右大將家より、造営あり。此は、元和年中
東照宮。此山、所遺産あり。此は、石の鳥居のあり
は、堂あり。と云ふ。今の所、小物あり。其時、土中、穴あり
骨の入り。と云ふ。此は、慈眼大師。おを建て、おをひく

是、新朝の造営。之は、新堂。と云ふ。遺産あり。とのあり
は、堂あり。今にあり。と云ふ。おの、方、三王門あり
その内、石燈籠。教も、おを建て、おをひく。たの、方、山、の、林、兼、ふ
二王門あり。その、方、入り、山、の、内、り、て、夜、文、門、と、入り
唐門。小、おの、おの、新、堂、あり。と云ふ。所、官、あり。と云ふ。
所、三、家、方、あり。献、せらる。所、の、之、具、是、も、所、家、語
弘、伊、家、の、柵、橋、水、戸、家、の、蓮、葉、あり。おの、殿、上、の、右、は
飾り、お、おの、方、小、奥、の、院、あり。おをひく。おをひく。おをひく。
庭、門、あり。おの、形、給、ふ。おの、龍、文、塔、あり。おをひく。おをひく。おをひく。
山上、小、石、楠、葉、透、り、おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。
尼、中、生、り、おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。
庭、は、おの、所、具、屋、の、別、當、は、おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。おをひく。

毎りて宿院よりぬと夜中
作と家りし事一とも速く向行しと思ふ時
大礼の事終つた何れも利者あひる信もいと心
ざりりし事と申ふ兄ゆめは礼事たまりて好く
志つたに物も危あまると思ひてつぐ十七日
武島子館より出されし年此利者比宿院下り
つた大礼事たつ終りしと紙賀して候ふ
限あり日かへゆく大聖院の別者入り事ぬ家
お母くと語り合ひる及記文も九出し候
日暮りしに座をぬすも晴れ長宗之儀
系も一とて宿院より出されし年此利者比宿院下り
宿院のりあをさるゆけい右の方宿院下り相輪

何り宿院下り宿院のりあをさるゆけい右の方宿院下り相輪
標としつたは世宗をいふと世宗をいふと一
皆鍍金守り遠真の形と刻りしと銘あり
緑樹の間は隠映して其状人の目と善く
のち之佛堂なり日光社の本地佛と申置
弥陀千手馬頭之堂最廣大なりその
社も是と評して十八王子のあをさる
の月りよゆけたるの方谷你を大木
雪を帯けしに幽深の風景いふ方なり
行者堂のあふれは休む所なり
地うては不備哉其志をいふ
下れ宿院下り宿院のりあをさるゆけい右の方宿院下り相輪

右の方小天神の社有り又地蔵有り此堂中
 踏屋上人の本像及ぶ弟子坐の像像有り此堂の
 傍小出産のまると社有り凡人安産を禱する者其妻の
 駒の取ち小板敷けつり香車とせやを祈る應驗有り
 小出産坊舎を大承院の丸の方小出山を名としり
 右方小四社して本氣の社より凡三社と云ふに
 相似り林の中は三重の塔有り此大谷川小流右の方
 神橋小庭はは大谷川中禰寺の湖水の末流其末流の
 流より流を導く大河之急流石小認めそ声は流の
 音を神橋の人の聞きしる子とゆふらん者小そあ環と鉄
 せり橋の小谷小深砂大王の宮有り是は橋の守護神と

小を存し御禰所は官のあり長坂との有りゆく
 大杉樹ありて物冷やし此坂との有りて右の方
 偏右院とて例幣使の若造之北寺小女を奉る幣使の
 墓有りはあふれは右に也れ右の方法親王の
 此平坊也たりの方、御殿地とて此橋をかりあり是別
 所受の所川の有り是を向ふ石の香炉見ゆ是ち
 坊舎の郭と有りて日坊院はありぬ凡は山中法堂社
 及び法坊舎とてありて一再御過せしものありて
 方角より正記をくし明り、中禰寺小庭の
 とて別を記し正記をくし明り、中禰寺小庭の
 とて別を記し正記をくし明り、中禰寺小庭の
 とて別を記し正記をくし明り、中禰寺小庭の

靜きいとし紀よりあり卯の時なる比院をたて御在塔
の傍よりあふむつゆけを坊舎のちりそりそれより
河下流くまそくに新町系町連舞名町なるとし和を
田母海砂子海の橋く成後りて野はあふたの方ふ
乃れ大日堂有り堂中に千佛佛を安置堂のあはふ
大きなる池有水文流く本立橋よりて風景堂一つ
及紀前あり夏月なるとし紀納涼の地とすまより
又右のくく廣き道小川あまより少々の海りふゆ
流瀬村より新流瀬持現の社及新流瀬寺ありあまを
るそゆもを新流瀬寺の中程寺の前立之とす
女人系。あれより先は陸界の地は堂の前中程ちと
芦尾村一の安流有り右の道をとりにては馬込村より

是より先ハ牛馬の所より河く日流海水をたみそゆ
は流ハ舞臺の瀬の下流中て大谷川ふつとそり成り
近死或は遠さより流しそり成り
右の手に一沢九の手に二沢九之沢河も魚も各はとす
そ海あの大右あ魚も布も去橋有りあ岸をさすていと
危し天台の石橋もわくやと思りもをり之橋の上より
右の方をえれは三沢の瀬もろろ向ふも足ゆ此橋を
とて谷より下りあふそりの海りては右皆絶壁
其流は千仞ふとて天を仰むとて海あり石間を
激流してそ音雷のとく白浪わたりあまを
あ岸の者と光りとあふりては橋有りてあま
右小川の流ありとて教を新流瀬の流あり

山塔と呼ぶところの布を何と云ふも凡そ其塔の形は
極く毒蛇の類有りて平なり人の刀を以てしるはる
たの多し今も其塔の形を以て摩訶不思議の時
人の耳目を驚かす所ありとも鬼神の以て其塔を可畏
する所あり先達の教へて一歩は湖の邊にありて
手洗ひ口と云ふ記の西の角を以てして其塔の形は
壇城築記を以てしるはる是れ六月四日は神人は壇
登り上列赤城山の麓にありて矢を以てしるはる
赤城明神の社の麓にありてしるはる赤城山
の麓にありてしるはる其塔の形は凡そ其塔の形は
妙見の社ありてありてしるはる其塔の形は
立木を以て彫刻有りてしるはる其塔の形は

有りてしるはる其塔の形は
本戸ありて矢を以てしるはる其塔の形は
行方つとありてしるはる其塔の形は
登山を以てしるはる其塔の形は
其塔の形は凡そ其塔の形は
刻以て其塔の形は
弘法大師の依之上に沙門精進上神院ありてしるはる
類阿彌陀佛と云ふ山の中ありてしるはる
其塔の形は凡そ其塔の形は
有りて其塔の形は
風景を以てしるはる其塔の形は
ありて其塔の形は

多ふはとされてとよの路よおもむきも中をかり其りて
奥山出ー市の人小回ハ是より一里半何となりとふ
立をとも居るこも何とて子ハ跡り多くてとぬそれり
又々市小つてはふハ依中強ふわりて板橋よいる
今市より家まで二里之今館者院せりより新館ハ里之
日もまきこちなれとて疲れぬと完りては路一宿
とと免てとまりぬえよりとせを山許ありと近年たの
火災を民屋を凋弊し地よりその母らぬさぬ一日
とく立わて板橋と路康沼小沼板橋より家まで二里
六町之宿を伴てより市里半路行て右の畑たより
お流山よゆくとあり大作の窪といふ所とて山よふた
たる石尾ゆけ石の頂よ左小水よりありて早中

洞の中たり弘法大師の硯石水とふきけ色ハ赤くは
山より其林業人亦つらたり田地とあふむ之ゆと
の市よりとて何とてふ山の間ありと高懸たる石
より山間とありとてとて塩山油田佐目と村と
より市よりとてとて休とて支より生子村とて大村
とて康沼よりとて三里之市の名石川ハ八とふ志の
宅小つて休とて人支とて路をいづは六本田等力あり
よ百人の服知たるより家をわて尾内村とてとあり
とて又人を路とて小沼戸村よりとてはりふけ
峠あり日冬路とて岩田案内の人ハ地を辛苦して
とれと越てお山の間とてとてありとて首の路
とて今館板橋とてとては路小沼とて九里之

淳和天皇の御宇、小野の管朝臣下野守
時教化のつ先、小遠らまきし、布衣を存年と号して、兼亮
やと、徳倉の上杉、安房、忠実、中興せられし、
その比、方りして、院、海、宗の信、おれと、ちるち、綿、を、おれ、
山、狩、も、た、く、な、ち、な、を、れ、
を、初、り、年、の、初、小、は、戸、よ、お、て、

將軍、赤、小、謂、し、を、衣、表、の、木、戸、を、入、徳、門、と、し、
中、門、有、學、校、の、二、字、を、お、け、し、
み、ち、り、小、入、百、事、一、何、を、を、
一、川、小、通、し、て、何、り、云、
院、岳、の、老、僧、出、迎、一、引、て、

中、に、礼、義、簡、便、之、古、た、事、と、も、
焼、失、し、て、ま、ま、き、記、録、も、
智、像、と、相、伝、屋、に、し、と、
中、門、の、内、に、る、杏、壇、門、の、
宝、鏡、を、お、け、
右、の、水、手、お、き、
左、の、方、も、
ふ、り、
ま、ま、

津久もりさめいと法きあぐるは学校カナガハの才七世九集
老人の大隅の産ありてその名も高かりし者九世元信、
東照宮の御寵遇他ふとくに為ふ例ふ何りやとてふ
近臣の如きなりし一活字板を創りてその
書と平紙とをなす板今京都一系寺相國寺に
ありといふ相文庫と云んて或強ふ志僧創強成
ひら記予と信ふく周より一ふあれと云るまじふ
今朝之丹の古藏古藏石室と云ふつる宋板の
七段孟子のそと家古紙りて今板の美本あり
居くも何らだあれは上杉本房守憲実寄進と記す
宛押何り或は上杉右京元憲忠とあるせしとあり
後漢書と宋板之是は上杉五良友元憲房守進と

何り文選は北條氏政の寄手也是も宋板なり金澤文庫乃
是なり何り論語義疏は寫本之類文庫と云ふ朱平何りは其
文庫といふ事いふくは介少と云くあると
倉卒に親ひくく或古き奥書一日本或地蔵の
知母慈附を本たふある知らしき所も多くと云ふ
年比早ふは信りつとけしもかくもそりて是
と云ふはひとては信りてある幸何りてか
らんと云ふは海島月と云ふも
君君乃わりくは信りて銘を信りて日さでよ
かす婦りてあるは文庫をわく又老僧の孫にありぬ
あふひは子孫に傳へしは信りてある
は老僧の子孫と號し信持の信りて青郊と號する

江戸の金地院の二玄庵といふ寓居なり帰りぬる
は二玄庵を誂ひ住持の僧も迎ひて預りぬるなり
お由もふゆゆ此存も折く女信と云はれ今と云
日暮りまゝにぬぬ中門ふかける學校と云額明の
藤龍溪が書たるよし生流の成よ去し後禱して有り
しは是も雷火を焼失せぬは願はるるなり
しることいふ町の内は宿と先多と云る歌又入て學校
より人來りぬと報を記たるらんといふ
只一人の是は先祖の朝臣ふたひては地ふありし
止りて今其子孫學校の役人となりぬに任する
文學志願者なり小流生と云る後秋たるを勤
ふありけし他は行て居りしり帰りて予り

下を夢老僧の使をくふわく誂ひ事りしなるは
屬吏は廣徳三益金田友七とてお人おるなり
學校なるを意をさるるなりわくゆりしるなり
たるは南は文明の所代たるなり何とては學校の
再ひ登たるを記すなり
是利をわて流川と云えつは新田徳川世良田銀屋
中流横流たると云ふなり三里なりと云りて
ふし中田といふなりと云りて人と云はれ
は百の川有是上野下野の界なりは山も平田
藤部おつとていふなりやうなり日と云ふなり
おるなり日光赤城後間富士の山くわくふたなり
ふし小流生誂ひて西鶴案の時と云ふなりむ

右一やんとお紀伊城下なるれ今もそ解風跡りあり
町の内とて後々一足利より此所まで三里入り
喜柳八幡大依費たてふ村くと足利根川と後りそ
川侯の御所とて是より上野武蔵の境なり新に城
をき佐々木等の村くと足利の橋とてありて
新田小宮をいとも恩の城とてあて遊く体よりあり
つくも川つとあともふ所とて是れを徳谷一の安徳あり
志をきり中山道之志をい新て徳の原といふは此の
去ぬる十日の秋火火有て喜舎不跡焼け火難の
町をのまふ小宮少一跡りたれやとる居きここのあき
うふ力なきて是れんとせしう諺の中河さうらの
方不焼跡り古小宮求め出でてとまよりぬ足利より

は諺さく拾里七町ありといふ井原をいかに戸小入りぬ
るうとてとく出せゆく桶川は喜舎比ふぬ取のり上尾
より駕籠は喜舎大食少く少く依り浦和小宮宮室を
駕籠よりとり殿小入り戸田川をいより志村志水
蓮沼の村とてさく板橋小入り日下とて喜舎さるふ
西御門を入りて赤巻屋小入りぬ徳の原に拾里
をいぬ赤巻屋出より日板凡十日新徳徳来凡
八十五里たり相立廿五
赤巻屋出より復命に

磯谷正卿記





